

なり、略中

承元五年建曆元年閏正月二日の朝目もおどろくばかり雪ふりつもりけるに、九條大納言家道參

内せられて、此ゆきは御覽すやとて、人々いざなひて、車寄に車さしよせて、別當の三位かうのす

け以下、内侍たち引ぐしてやり出されけり、中宮は后町よりいまだ入せおはしまさねば、中御門

殿へやりよせて、宮の女房一車やりつゞけて、大内右近馬場賀茂の方さまへ、あこがれゆかれけ

る、大納言直衣にて騎馬せられたりけり、さらぬ人々も、或は直衣、或は束帯にて、六位まで伴ひた

りけり、賀茂神主幸平、狩装束して、車のともに參れり、むかしはかゝる雪には、馬に鞍置まうけて

こそ付しに、今はかやうの事たえて侍つるに、めづらしくやさしく候ものかなとて、わかき氏人

ども、おなじく狩装束して、みなく鷹手にすへて、かんだちへのかたへ、御ともつかうまつりて、

雪の中のたかゞりして御覽せさす、道すがらいと興有事共ありけり、略下

〔富士御覽日記〕永享四年壬子九月、富士御覽の御下向に、義教初足利の十日、京都出御、同十七日駿河國

藤枝鬼巖寺に御下著、雨すこし時雨で、曉方より晴て、月はあり明にて、いそぎ御立同十八日、府中

先小野繩手にして、御輿たてられ御覽じて、前後左右どよみあひ御跡はいまだ藤枝五里のほど、

何とはなくつたへく、山も河もひゞきわたりけるとなん、御著府すなはち富士御覽の亭へ、す

ぐに御あがりありて、

みずばいかに思しるべきことのはもおよばぬふじとかねて聞しも、

〔太閤記十六〕醍醐之花見

尼孝藏主をもつて仰られしは、三月十五日、醍醐の花見を催され候はん、政所殿も見物あるべき

よし申候へと宣ふ、略中

醍醐御普請之覺